様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３７１

研究課題名（和文）中欧の精神風土と現代チェコ文化の「笑い」

研究課題名（英文）The Mental Climate of Central Europe and the Laughter in the Contemporary Czech Culture

研究代表者
石川　達夫（ISHIKAWA, Tatsuo）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：００２１２８４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　重要な中欧論であるクロウトヴォル『中欧の詩学』を訳出して出版すると同時に、この本に「想像の共同体としての中欧」という論文を付け、中欧の精神風土、チェコ文化の特徴、チェコ的笑いについて論じた。「チャペックとマサリク」では、中欧の精神風土とそこから生まれた文化の特徴を多文化社会的状況という観点から明らかにした。『プラハのバロック』において明らかにしたチェコ文化の「二枚舌」的性格と共に、本研究全体として、多民族社会とそこでのトランスナショナリティーとマージナリティー、チェコの複雑な歴史に由来する精神風土の特徴を明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：I have translated and published Josef Kroutvor's important book about Central Europe Potize s dejinami into Japanese and at the same time I have written a paper "Central Europe as the Imagined Community" for this book. In this paper I argued about the mental climate of Central Europe, the characteristic of the Czech culture and the Czech laughter. In another paper "Capek and Masaryk" I analysed the mental climate of Central Europe and the characteristics of Czech culture which rooted in it from a viewpoint of the situation of the multicultural society. In this whole research I analyzed ed multinational society of Central Europe and people’s transnationality and marginality in it, and the characteristics of the mental climate which stems from the complicated Czech history.

研究分野：スラヴ文化論

キーワード：チェコ　中欧　ハプスブルク　笑い　クロウトヴォル　トランスナショナリティー　マージナリティー　多文化社会

１．研究開始当初の背景

現代チェコ文化を代表するミラン・クンデラ、ボフミル・フラバル、ヨゼフ・シュクヴォレツキーらの小説、ヴァーツラフ・ハヴェル、ヨゼフ・トポル、ヤーラ・ツィムルマンらの戯曲、ヤン・シュヴァンクマイエル、イジー・メンツル、ミロシュ・フォルマン（フォアマン）らの映像作品などにおいては、「笑い」が非常に重要な役割を果たしている。クンデラの場合、このことは『可笑しな愛』『冗談』『笑いと忘却の書』といった彼の代表作の題名にも明示されており、『笑いと忘却の書』においては「天使の笑い」と「悪魔の笑い」という二つの「笑い」について自ら独自の考察を加えているほどである。

チェコ的な「笑い」がクンデラのいう「悪魔の笑い」に属することは疑いなく、これはハヴェルが「われわれのこの中欧の環境においては、極端な形で、きわめて深刻なものが、つねにきわめて滑稽なものと結びついているように思える。それがまさに、一歩退いて距離を取り、上から見渡し、自分を笑うという特質であり、その特質が、この地のテーマと行動に、ようやく本当に人を震憾させるあの深刻さを与えるのである」と述べているように、中欧の独特な精神風土と密接な関係にあることは間違いない。そしてこのようなチェコ的、中欧的な「笑い」は中欧人にとってはなじみ深いものだが、シュクヴォレツキーが「（外国の）批評家たちは、私のチェコの同僚の作家たちの著作の中にも私自身の本の中にも見いだされる悲劇と喜劇の混合に、しばしば当惑する。私たちは何か特殊な効果を狙ってわざとそうしているわけではない。私たちが若かった頃の中欧では、ただただ人生がそういう姿をしていただけなのだ。私たちにはどうしようもない」と述べているように、非中欧人にとっては理解しにくい「笑い」でもある。それは恐らく、この「笑い」が地政学的・歴史的に特殊な状況に置かれてきた中欧の精神風土において発展したものだからである。

中欧諸国はもともとロシア、ウクライナ、ベラルーシといった正教圏やバルカンの一部に見られるイスラム圏のような東ではないが、さりとていち早く近代的国民国家の形成に成功したイギリスやフランスのような西欧とも異なる部分もあって完全に西でもなく、ロシア・東欧と西欧とのはざまで固有の性格を持つ地域である。加えて、中欧の多民族混在と異質なもの共存、国家の分解に次ぐ分解と頻繁な国境線の書き換え、周辺の大国や多民族からの絶えざる圧迫と度重なる支配などによって、中欧では独特の精神風土が形成されてきた。そしてここから、異質なものに取り巻かれ、異質なものの介入によって（十全たる）歴史になれない歴史、（個人のレベルでは）自分になれない自分という不条理が常態化し、悲劇的なものと喜劇的なものが表裏一体をなす「滑稽な真実」を表現する独特の「笑い」が発展したと考えられる。

この点で興味深いのは、クロウトヴォルの「中欧の困難さ――アネクドートと歴史」という評論である。ここでクロウトヴォルは、「中欧」という地政学的概念を文学的に分析し、西欧の「歴史性」とは異なり、自分たちの歴史を断ち切られてきた中欧の「非歴史性」の中で、中欧の作家たちはメランコリーとグロテスクの交差としての「滑稽な真実」を描いてきたのであり、「チェコ的な滑稽さは不条理な状況の意識である」としている。このようにチェコの「笑い」は、中欧、とりわけチェコが置かれた固有の地政学的・歴史的条件において発展した詩学的手法であるとともに、困難な条件下で生きてきたチェコ人にとって一種の「生きる知恵」として実存的意味も持ってきたのだと想定される。

このようなチェコ的な「笑い」については、日本ではチェコ文学者が非常に少ないということもあり、まだほとんど全く研究されていない。またチェコ本国では、上述のクロウトヴォルなどが断片的に論じているものの、このような「笑い」がチェコ人にとってはあまりにもなじみ深いもので当然のものであるせいか、外国人にとっても理解しやすいようなまとまった研究は出されていない。チェコ以外の外国では、確かに数多くあるクンデラ研究の中で、クンデラの作品分析との関係である程度論じられているものの、クンデラ研究の多くはフランス文学者によるものであるため、中欧の独特の精神風土との関係で本格的に論じたものはないようである。

本研究は、そのような背景において、現代チェコ文化において重要な役割を果たしてきた「笑い」に関する統合的な研究を行うものである。

２．研究の目的

申請者はこれまで長らくチェコ精神史・文化史研究に従事して研究成果を公刊してきたが、チェコ文化は中欧全体、特に旧ハプスブルク帝国の枠組みを考慮に入れなければ十分に論じられないため、中欧論にも守備範囲を広げてきた。他方、現代（特に 20 世紀後半）のチェコ文学の翻訳と研究にも従事し、本研究との関係で言えば、「ミラン・クンデラ――悪魔の笑い」、「後期全体主義における言葉の抵抗力――クンデラとハヴェルをめぐって」、「ソロモンの印――ボフミル・フラバルと『あまりにも騒がしい孤独』」などの論考において、現代チェコ文学の個々の作家と作品における「笑い」を分析しようと試みてきた。本研究はこれらの研究を発展させ、地政学的・歴史的に特殊な状況に置かれていた中欧の独特の精神風土との関係において、現代チェコ文化において重要な役割を果たしてきた「笑い」に関する統合的な研究を行うことを目的とする。

その際、現代チェコ文化を代表するクンデラ、フラバル、シュクヴォレツキーらの小説、

ハヴェル、トポル、ツィムルマンらの戯曲、シュヴァンクマイエル、メンツル、フォルマンらの映像作品を取り上げて具体的に分析し、まず作品における「笑い」の機能と意義、チェコ的な「笑い」の特徴を明らかにする。さらに、チェコ的な「笑い」は、地政学的・歴史的に特殊な状況に置かれてきた中欧の難局や不条理の中で人間が生き延びるための一種の「知恵」としての実存的意味を持ってきたという仮説に立って、そのようなチェコ的な「笑い」が持つ、人間にとっての実存的で普遍的な意味を明らかにする。

「人間は笑う動物である」というアリストテレスの定義にも示されているように、「笑い」が人間にとって本質的なものであることは疑いないが、喜劇的であると同時に悲劇的であり、グロテスクであると同時にメランコリックな現代チェコ文化の「笑い」は、「笑い」の中でも特に注目すべきものであり、チェコ的な「笑い」を解明することによって、現代チェコ文化、およびその背景を成すチェコと中欧の精神風土を深く理解できるようになるばかりでなく、人間をより深く理解できるようになると思われる。

３．研究の方法

本研究では、１．チェコとその他の中欧の知識人による中欧論、とりわけチェコの批評家・美学者ヨゼフ・クロウトヴォルの重要な中欧論である『歴史の困難さ』（Potize s dejinami）を精読しつつ中欧の精神風土を考察する。２．現代チェコ文化の代表的な小説家（クンデラ、フラバル、シュクヴォレツキーら）、劇作家（ハヴェル、トポル、ツィムルマンら）、映像作家（シュヴァンクマイエル、メンツル、フォルマンら）の作品において「笑い」がどのように構成され、いかなる意義を持っているかを具体的に分析する。３．中欧の精神風土との関係において現代チェコ文化の「笑い」を考察して、作品におけるチェコ的な「笑い」の意義を明らかにすると同時に、人間にとってのその実存的意味を明らかにする。

その際、現地で資料を収集し、実地調査を行うとともに、チェコの研究者との意見交換を行う。

４．研究成果

初年度（2013 年度）から取り組んできた、重要な中欧論であるヨゼフ・クロウトヴォルの『中欧の詩学――歴史の困難』（原題：Potize s dejinami 歴史の困難さ）の精読と訳出を終えて、2015 年に法政大学出版局より出版した。この本には、石川達夫「「想像の共同体」としての中欧――トランスナショナリティーとマージナリティー」という論文を書き下ろして付け、ここで中欧の精神風土、チェコ文化の特徴、チェコ的笑いについて論じた。複雑な歴史を辿って来た非常な多民族国家ハプスブルク帝国においては、民族を越境したり、そもそも民族的境界が曖昧であったりするトランスナショナリティー、より大きな民族や支配者・権力者の周辺や下にいる人間のマージナリティーが特徴的であり、そのようなマージナルな存在の独特な眼差しから「笑い」が生まれることを、この論考で指摘した。

この本は朝日新聞の書評欄で取り上げられて紹介されるなどして話題を呼び、中欧人と中欧文化の独特の性格についてこの本を通じて日本でも理解が深まったと思われる。

2015 年度にはまた、石川達夫「チャペックとマサリク――キュービズムと多文化社会」『現文研究』を発表し、両大戦間チェコスロヴァキアの多文化社会的状況から生み出されたチェコ文化の特徴について論じた。これよって、中欧の精神風土とそこから生まれた文化、とりわけキュービズムの特徴を、チェコ人、スロヴァキア人、ドイツ人、ユダヤ人などが共存する多文化社会的状況という観点から明らかにした。絶対的な基準・視点を喪失して、キュービズムのように物事を様々な相対的な視点から見て評価することが、中欧人の一つの特徴であることを、この論考において指摘した。

2014 年度に出版した『プラハのバロック――受難と復活のドラマ』（みすず書房）において明らかにしたチェコ文化の「二枚舌」的性格――カトリックに弾圧される隠れプロテスタントが本心を隠したことに由来する――と共に、本研究全体として、中欧の精神風土の特徴をある程度明らかにできたのではないかと思われる。

また、チェコに出張した際にヨゼフ・クロウトヴォル氏に会い、自宅に招かれて本研究に関係する様々なテーマについて議論し、知識の提供を得られたのは大きな収穫であり、今後の研究にとっても大いに有益であった。

ただ、３年間という研究期間は短すぎて、当初計画していた 20 世紀チェコの創作者たちの作品の具体的な分析を通して中欧の精神風土とチェコ文化の笑いを明らかにするという課題は、残念ながら十分に果たせなかった。もっと研究期間を長く取るべきだったというのが反省点である。研究期間は終わってしまったが、具体的な作品を通した分析を今後も続け、最終的には研究全体を研究書にまとめて出版したいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 石川　達夫、チャペックとマサリク――キュービズムと多文化社会、現文研究、第 92 号、査読無、2016、２－19 頁

② 石川　達夫、プラハ・バロックの背景と特徴――敗者のバロック、専修大学人文科学研究所月報、第 270 号、査読無、2014、

１－33
③ 石川　達夫、チェコの民族運動と言語闘争――非自明性打破の手段としての記号的世界の構築と現実化、日本独文学会研究叢書 097：プラハとダブリン――20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス（その２）――フリッツ・マウトナーとその射程、査読無、2013、６－21頁

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　２件）
① ヨゼフ・クロウトヴォル著、石川　達夫訳、法政大学出版局、中欧の詩学――歴史の困難、2015、272
② 石川　達夫、みすず書房、プラハのバロック――受難と復活のドラマ、2015、320

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
石川　達夫　（ISHIKAWA Tatsuo）
専修大学・文学部・教授
研究者番号：00212845

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：